

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Prehispanic Cultures of the Western Slope of the Southern Peruvian Andes

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井, 龍彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004532

南部ペルーアンデス西斜面地域の先スペイン文化

藤 井 龍 彦*

Prehispanic Cultures of the Western Slope of the Southern Peruvian Andes

Tatsuhiko FUJII

This paper is a general survey of some archaeological sites of the western slope of the Andes of southern Peru in the valleys between the R. Yauca and the R. Caplina. Nine sites were visited to make general observations on the environment and structures, as well as to collect surface materials.

In this area the western slope of the Andes, sometimes called the "Far South Coast", shows a development of indigenous cultures distinct from elsewhere in the Central Andes. It is thought that the biological and physical characteristics of this region precluded the autochthonous emergence of agricultural society, and it is supposed that the first appearance of agricultural society in this region was around the Middle Horizon (ca. A.D. 600). It is my thesis that advanced technology such as terracing and canal irrigation, accomplished by the Wari people, made possible the development of the region, hence the societies which developed there may have comprised a type of colony of the Wari Empire, later of Expansive Tiahuanaco Culture. Perhaps because of this the most archaeological sites are situated near a present-day human settlement. This distinguishes the region under study when it is compared with the northern and central highlands of Peru. Another peculiarity of this region is the existence of a great many public and ecclesiastical documents.

For clarification of the development of the indigenous cultures of the Western Slope of the Southern Peruvian Andes joint studies by ethnologists, ethnohistorians and archaeologists are required.

* 国立民族学博物館第4研究部

はじめに

I. 自然環境

II. 遺跡の一般調査

1. オコニャ川流域

2. カマナ=マヘス川上流域

3. タンボ川流域

4. イロ=モケグア川流域

III. 南部ペルーアンデス西斜面地域の先
スペイン文化の特徴

おわりに

は し め に

古代アンデス文明を支えていた中央アンデス地帯の農牧社会は、1532年にインカ帝国が征服され、この地がスペイン人の植民地となると共に大きな変化を余儀なくされた。とくに広い耕地のある海岸地方では、土地をスペイン人の農場経営のために収奪され、住民は農場の労働力として酷使されるようになった結果、先スペイン期以来の伝統的な社会はほとんど全面的に崩壊してしまった。

いっぽう高地では、カトリックの布教、スペイン人による新しい町の建設に伴う住民の移動、鉱山の開発のための労働力の徴発、外来の疾病による人口の減少などによる変化は見られたが、海岸におけるほど全面的かつ急激なものではなかった。むしろこの地域では、高度差が非常に大きいという生態学的な環境を最大限に利用した生業形態、あるいは異なった環境の地域間の交易や互酬による結びつきなどが、新しい作物や家畜の導入にもかかわらず保たれているし、衣食住などの面でも、伝統的なものを全て失ったわけではなく、新旧の要素が混在しているのが現状である[KUBLER 1946; MISHKIN 1946]。そのため、中央アンデス農牧社会の研究は、先スペイン期にまで遡る文化史的な視野も含めて進められなければならない。

本稿は以上の点をふまえて、昭和53年度文部省科学研究費補助金（海外学術調査）に基づく、「中央アンデス農牧社会の民族学的研究—海岸・高地・熱帯低地地域間の動態的社会関係」（研究代表者増田昭三東京大学教授）をテーマとした調査団の一員として、南部ペルーアンデス西斜面地域で行った先スペイン文化調査の報告として書かれたものである¹⁾。

今回の調査は民族学を主としたものであったため、遺跡の発掘は行わず一般調査の

1) 今回の調査期間中に、アプリマク Apurímac 県のカライバンバ Caraybamba, アヤクチュ Ayacucho 県のワリ Wari, リマ県のカニェテ Cañete 川流域の一部, 同じくチャンカイ Chancay 川流域の一部などの一般調査も行ったが、これらは本稿で扱う地域に含まれないため、稿を改めて報告する予定である。

みを行った。その結果得られた資料は、遺跡の位置、環境、立地、規模、遺構の大きさと構造、表面採集による遺物などにとどまり、決して十分なものとはいえない。また、広大な範囲を対象としたため、その全てをカバーすることは不可能であった。そこで、これまでに具体的な調査報告が皆無に近かった、オコニャ Ocoña 川上流のコタワシ Cotahuasi 谷、カマナ=マヘス Camaná-Majes 川上流のチュキバンバ Chuquibamba 周辺、タンボ Tambo 川流域のプキナ Puquina 付近、イロ=モケグア Ilo-Moquegua 川中流のモケグア周辺などを重点的に調査した。

I. 自然環境

本稿であつかう南部ペルーアンデス西斜面地域とは、ヤウカ Yauca 川以南チリとの国境までの海岸、およびアンデス高地の太平洋側斜面からなる地域を指す(図1)。

この地域の気候は、基本的には他のペルーアンデス西斜面と共通の特徴を持っている。すなわち、海岸は南太平洋亜熱帯高気圧の東縁に入るため、年間を通じて降雨はほとんどみられない。しかし海から陸に向けて弱い風が吹いており、この風が沿岸を流れる冷たいペルー海流(フンボルト海流)の上を通る時冷されて海霧が発生する。海霧は高さ 500-1,000 m の間でとくに濃く、この高さの土地に時に霧雨を降らせることがある。いっぽう高地では、10月-3月の南半球の夏季に南東の貿易風が強まる。アマゾンの熱帯低地を渡ってくる湿度の高いこの風は、アンデス山脈にぶつかり急激に上昇して雲を作り、高地に雨を降らせる。西斜面に抜けた風は非常に乾燥している。海岸の海霧は、夏季にはこの風の影響であまり内陸に入らないが、冬季になって風が弱まると 3-40 km 内陸にまで広がる。

中央アンデス地帯の気候は以上のように夏季に雨が降り、冬季には海岸が海霧におおわれるという点が特徴である。ところが、ペルー北・中部では高地の幅が狭いため、高地の東肩で発生した雲は西斜面にまで広がりその上部に雨を降らせる。しかし南部では幅が非常に広がるため、西斜面での降雨は少ない。反対に、海霧が一番濃い部分とほぼ同じ高さの丘陵が南部では海岸近くに連なっているため、その影響は北・中部よりはっきりと現れている。この状況の具体的なデータとして、カマナ=マヘス川流域の河口から源流近くまでにわたる5つの地域の年間雨量、海岸からの距離、標高を表1に示す。

この地域の地形は、高原(高位準平原遺物)、山腹斜面、丘陵地、台地がほとんどを占め、平野はわずかに最南端のサマ Sama、カプリナ Caplina 川下流部にみられ

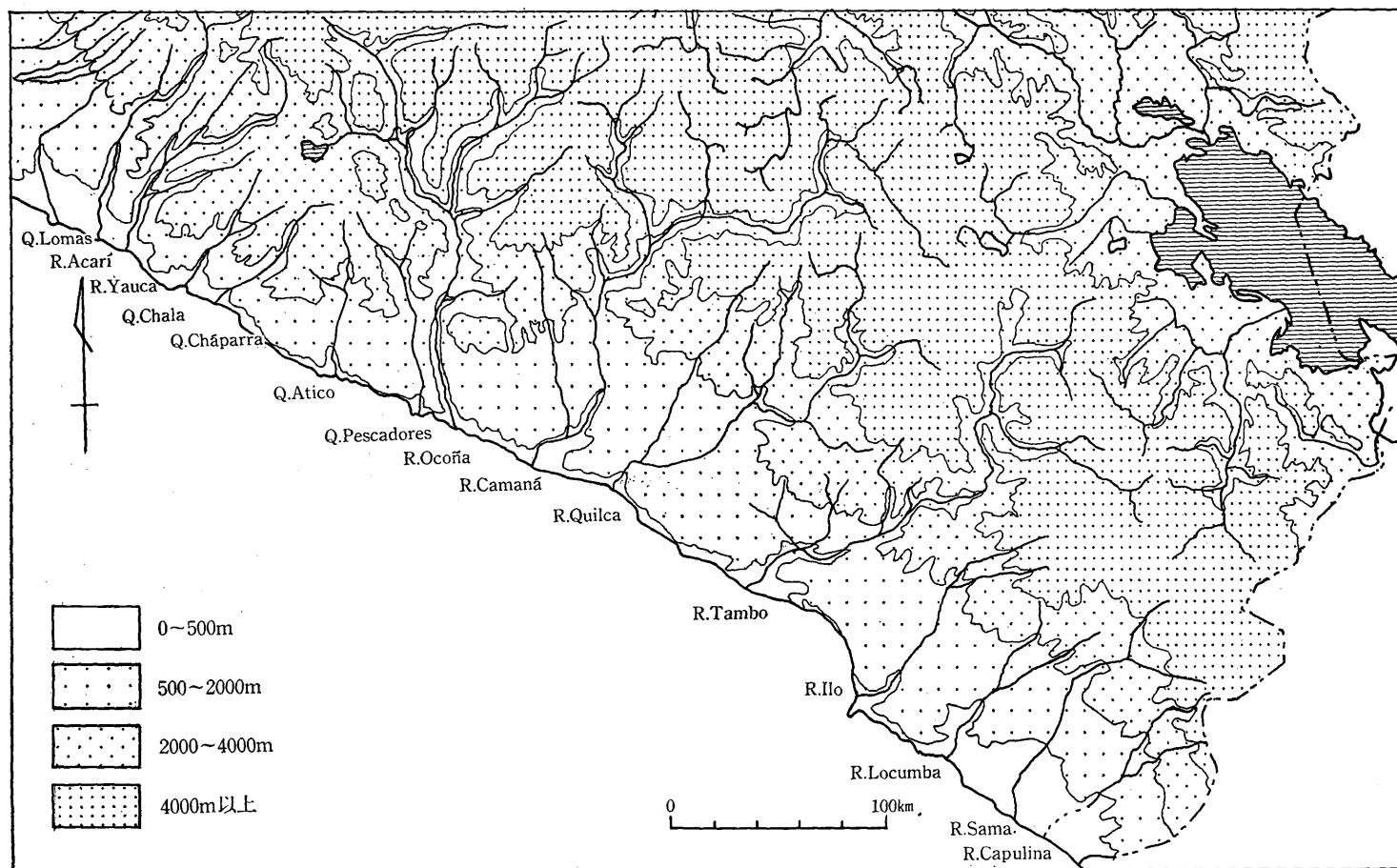


図1 南部ペルーの地形

表1 カマナ=マヘス川流域の雨量*

	年間雨量 (mm)	海岸からの距離 (km)	標 高 (m)
カ マ ナ	11.6	3	20
パンパ・マヘス (Pampa Majes)	7.0	50	1,500
ア ヨ (Ayo)	93.0	120	2,000
ア ン ダ グ ア (Andagua)	444.0	140	3,600
オルコパンパ (Orcopampa)	508.0	160	3,800

* [INSTITUTO NACIONAL DE PLANIFICACION (ed.) 1969: 131] による。

るにすぎない[佐藤 1979: 12]²⁾。とくにチャラ Chala 川からカマナ川の間では、他の地域では海岸線からかなり退いている山腹斜面が、直接海に落込んでいる。そのため、この間を通るパンアメリカン道路は、幅 1 km 足らずの狭い海浜や海に面した崖の中腹に設けられている。海岸平野がほとんどないと対照的に、この地域には標高 500-2,000 m の広大な台地が広がっている。パンパ pampa とよばれるこの台地は、アンデス山脈の西縁を形成する西山系の麓と、海岸に沿って連なる低い丘陵性の海岸山脈の間を埋める第三紀の堆積層で形成されたもので、ゆるやかな起伏と傾斜を持っている。その幅はこの地域の中部のキルカ Quilca 川あたりが最大で、70 km にもなる。台地の西縁の海岸山脈は、北のパラカス Paracas 半島にまで続くが、それ以北は海中に没しペルー北・中部海岸の大陸棚の縁を形成している。この地域の地形を特徴づけるもう一つの要素は、西山系の西肩に点々と噴出した多くの第四紀の火山である。その中にはアレキパ Arequipa 富士として有名なミスティ Misti のように美しい円錐形のものもいくつかある。これらの火山の多くは標高 5,000 m を越え、頂上に万年雪を頂いている。また、火山から流出した溶岩流は西へ広がり、とくにヤウカ川とオコニャ川の間では前述のパンパの上に重なって標高 2,000 m を越す広い台地を形成している。

これらの台地を横切って太平洋に注ぐ川が、ヤウカ川からカプリナ川まで13本ある。そのほとんどが斜面を直行して下ってくるため急流となっている。13本の川のうち、標高 4,000 m の高地の奥深くに源頭を持つものは、オコニャ、カマナ=マヘス、タンボの3つだけである。この3つの川は流域も広く、夏季には高地に降る雨を、冬季には高山の雪解け水を集めるため、水量が豊富で年間を通じて水が流れている。その他の川は、いずれも西斜面に始まる長さ 100 km 前後の短いもので、水量は少なく、と

2) 本号の増田による論文の図1参照。

くに冬季にはほとんど涸れてしまう。この他にも、現在は全く水の流れない涸川が、これらの川に並行して数多くみられる。前述のように、この地域のほとんどが山腹斜面あるいは丘陵地が海に接しているという地形のため、ここを流れる川は最南端のサマ、カプリナの 2 つを除いて、全て河口まで深い峡谷状になっている。たとえば、この地域で最大の流域面積 (10,690 km²) を持つカマナマヘス川は、河口近くで海岸山脈を横切る部分の谷幅はわずか 750 m、約 70 km 上流のコリレ Corire とアブラオ Aplao の間では、高さ 500 m 幅 950 m の峡谷となっている [ROMERO n. d. : 106]。

以上のような気候・地形条件から、この地域の生態環境は高度と海岸からの距離にほぼ比例して、下から ① 亜熱帯砂漠 (Desierto Sub-Tropical)、② 低部山地砂漠 (Desierto Montano Bajo)、③ 低部山地乾燥灌木林 (Matorral Desértico Montano Bajo)、④ 山地ステップ (Estepa Montano)、⑤ 亜高山湿潤灌木林 (Páramo Húmedo Sub-Alpino)、⑥ 高山多雨ツンドラ (Tundra Pluvial Alpino)、⑦ 氷雪 (Nival) の 7 つに分けられている [ONERN 1973, 1974, 1975a, 1975b, 1976] (図 2)。

①と②は文字通り非常に乾燥した砂漠で、部分的にサボテン (*Cereus* 属) などの耐乾性植物や、塩性植物がみられるにすぎない。しかしこの中で例外的に、海岸沿いの 500–1,000 m の丘陵地の上部では、前述の冬季に発生する海霧による湿気やわずかな降雨の影響で、イネ科やマメ科の植物が生育するローマス lomas とよばれる特異な場所がある。③と④のうち、③は半乾燥地、④はやや湿潤な地域である。いずれも西斜面上半の傾斜の比較強い所で、地形はかなり複雑になっている。植生は小灌木が主で、後者ではトラ *tola* (*Lepidophyllum quadrangulare*) というキク科植物が卓越している。⑤は標高 4,000 m を越す高原で、一般にプーナ puna とよばれているところである。植生はイチュ (ichu: *Stipa ichu*) を主とした草が多いが、部分的に *Polylepis* 属、*Buddleja* 属などの灌木がみられる。⑥、⑦は主としてアンデス西山系に噴出した火山の頂上から中腹にかけての地域で、⑥にわずかな地衣類がみられるほか植生はない。

このような生態環境を持つ南部ペルーアンデス西斜面の人間の活動は、海岸のローマスにおける冬季の移牧、砂漠を横切って流れる川の谷底沿いの細長い平地や、斜面上部の傾斜の比較ゆるやかな川沿いの部分などでの灌漑農耕、および高原での牧畜が主なものである。この地域の生態環境の利用に関しては、本号の大貫の論文に詳しいのでここではこれ以上ふれない。

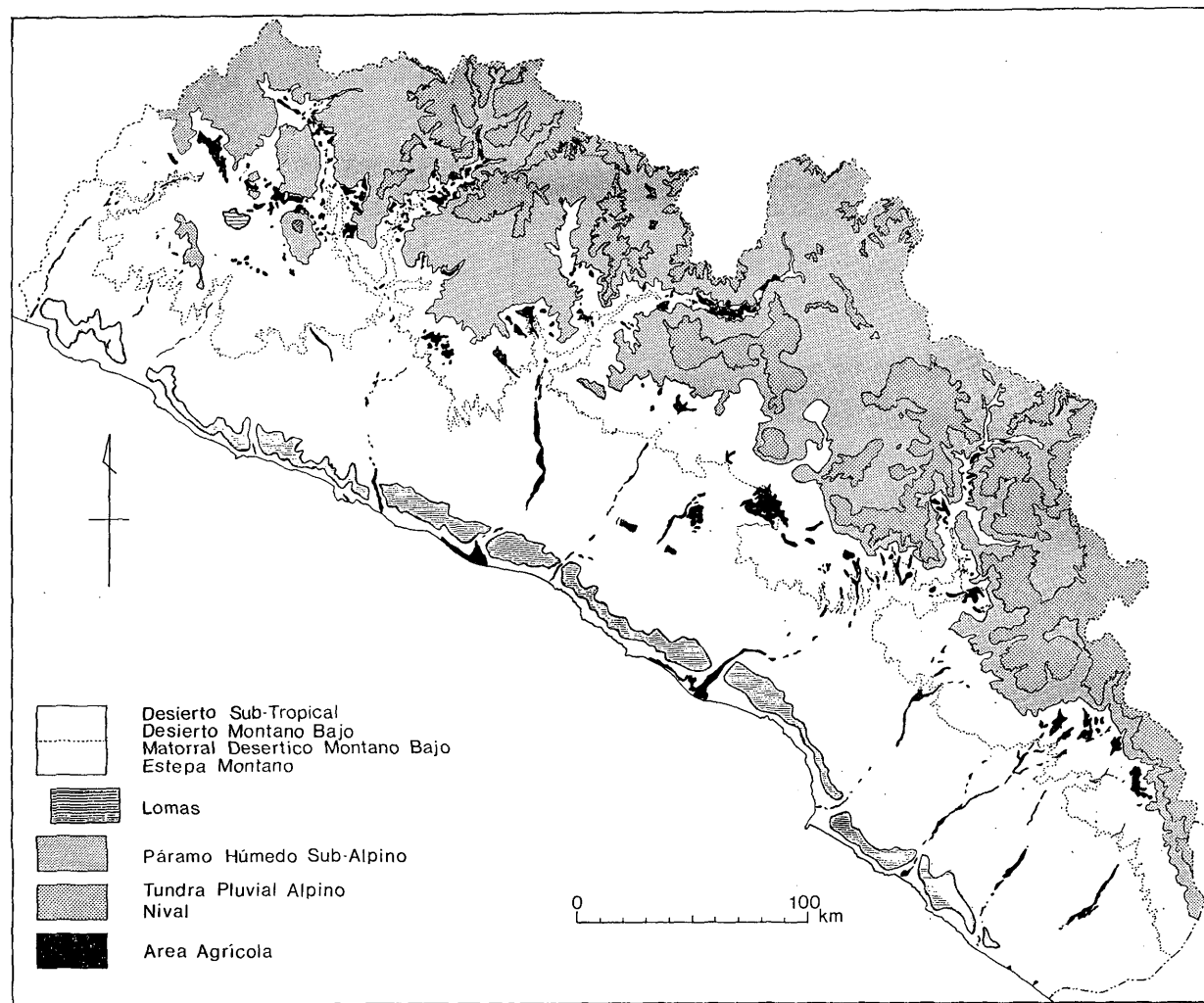


図2 南部ペルーアンデス西斜面の生態区分図

Ⅱ. 遺跡の一般調査

はじめにも述べたように、今回は民族学を中心とした調査であったため、遺跡に関しては表面的な一般調査にとどまり、数も9カ所にすぎない(図3)。以下それぞれの遺跡についての記述と考察を行う。

1. オコニャ川流域

プエブロ・ビエホ Pueblo Viejo 河口から約4 kmの川の右岸。パンアメリカン道路が川を渡る地点から500 mほど行った、プエブロ・ビエホという数軒の家のある小集落の手前の道路際にある。川の両側に続く高さ4-500 mの急傾斜地の麓で、川底の平坦部から5 mほど高い。

遺跡は白っぽい砂質の岩盤を掘って営まれた墓地である。かなり盗掘されており、墓をおおっていたと思われる大きな木やカニャ・ブラバ caña brava が露出している。墓の構造・規模は不明。周囲には多くの人骨片、赤褐色ないし茶褐色の無文の土器片

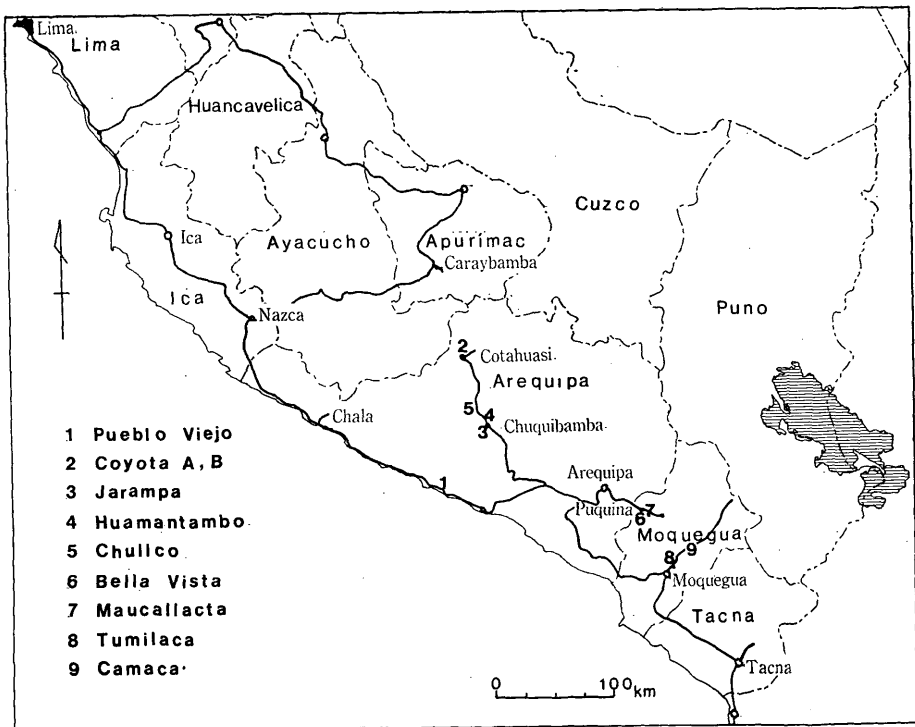


図3 調査ルートおよび遺跡(1~9)

が散乱している。その中に、赤地黒彩の幾何文様を持つ土器片、木製紡錘車、小刀状木製品（写19）が各1点ずつある。

この遺跡は河口近くに位置するが、小刀状木製品がペルー中部海岸の例からみて農具と考えられるので、農耕民の墓地であろう。この墓地に対応する住居址は付近には認められない。しかし、遺跡に接した現在の小集落の場所が、そうであった可能性はある。時期は不明であるが、対岸のチュレ Chule という墓地遺跡からチュキバンバ文化の影響の認められる布片が出土しており [石田ほか 1961: 253-254]、この遺跡にも赤地黒彩の土器片があることから、同時期のものと考えられる。オコニャ川下流部は、両側を高い急な斜面で限られた最大幅 2 km ほどの峡谷状態が河口まで続いており、川底の平地のみが耕地として利用されている(写1)。雨は全く降らないが、川の水量が豊富なため年間を通じて灌漑による耕作が可能である。現在は水田が盛んに開発されている。しかしそれを除いた耕作物としては、トウモロコシ、マメ、サツマイモなど、先スペイン期以来のものが大部分を占めている。このような作付状況を示すこの地域は、ペルーのほとんど全ての海岸地方が、スペイン人による征服後にサトウキビ、棉、ブドウ、牧草などの単一作物の大規模耕作に変わってしまった中で、伝統的な姿を残しているという意味で貴重な所といえよう。

コヨタ Coyota A, B オコニャ川最上流部のワルカヤ Huarcaya 川右岸、コタワシの町の数 km 上流にある。町の対岸にあるため、遺跡に行くにはさらに数 km 上流の吊橋を渡らなければならない。遺跡は標高約 2,600 m、川面からの比高 10 m ほどの段丘上にある。吊橋を渡ったところは灌漑により耕地となっているが、遺跡の周囲はサボテンやとげの多い灌木の生えた荒地である。このあたりは、低部山地乾燥灌木林地帯である。

遺跡は 500 m ほどの距離をおいて A と B の 2 つからなる。いずれも小さな起伏のある段丘の窪地になった部分を選んで造られている(写2, 3)。規模は A がやや大きく約 50 m×30 m、B は約 30 m×20 m である。構造は両者とも全く同じで、ほぼ方形の高い石壁をめぐらし、内部には連続した多くの部屋と中庭あるいは広場を持っている。壁は割石を積み土で固めたもので、高さは 2 m を越し時に小さな壁龕を持つ(写4)。外壁の入口の数については、崩れた所が数カ所あるのみで確認できなかった。建物の内部にはあまり土器片がみられないのにたいし、外部、とくに B の西側の小高い部分に比較的多くの土器片が散布していた。そこには建造物の土台と思われるような石列が残されており、A, B より古い時期のものかもしれない。土器片はいずれも小片で、内部のものはほとんどが無文であるが、外部のものは文様(赤地黒・

白彩)を持つものもある(写20, 21)。

この2つの遺跡は、建物の構造やプランからみて農民の住居址とは考えられず、おそらく支配者階層の居住地であったと思われる。しかし全く同じ構造を持つ A, B 両者の関係については判らない。あるいはインカ時代にあり現在の農村にもその伝統が続いている双分組織と結びつくものであろうか。時期に関しては決め手がないが、石壁の遺存状態が良好であるところから、あまり古いものとは思われない。インカ期あるいはその直前ぐらいという可能性が高い。いっぽう B の外のものは彩文土器の中に、中期ホライゾン(紀元600-1000年)のワリ文化的な文様を持つものがみられる。ワリ文化の南限はアレキパ市あたりまで及んでいたとされており [LUMBRERAS 1974: 150], この地域はその中に含まれるので可能性はある。しかし、結論は発掘調査をまたねばならない。いずれにせよ、コタワシの谷は気候温暖でブドウが栽培されている谷底の平地から、トウモロコシやジャガイモ畑のある斜面の耕地を含む豊かな土地である。また、いつ頃開発されたのかは不明であるが、近くにはワルワ Huarhua という有名な岩塩の鉱山がある。さらに、この谷の北の高原を越えると、南部ペルーアンデス東斜面では最大の川であるアプリマク川の流域に出ることができ、東西の斜面を結ぶ交通路の中で重要な場所を占めている。このような条件が、海岸からはるかに離れた山間の谷間に、古くから人を定着させたのであろう。

2. カマナ=マヘス川上流域

ハランパ Jarampa カマナ=マヘス川の支流のひとつであるグランデ Grande 川の源頭に近い、チュキバンバの町の南約 2 km にある。町の西に続く台地から張り出した丘陵の先端部で、標高は 2,929 m である。生態環境としては山地ステップに入るが、遺跡の周囲はむしろ半乾燥地で灌木がまばらに生えているにすぎない。

遺跡の広さは、石積みの壁などの遺構のある所や土器片の散布する範囲から、おそらく数 km² におよぶと思われる。丘の頂上部は非常に大きな石を用いた土留壁がめぐらされた 30 m 四方ほどの広場になっている(写5)。建造物は町に面した北側の緩斜面に広がっている。ほとんど崩れており、現在は斜面を階段状にするための土留壁と、これと直交する建物の壁の礎石だけがみられるにすぎない。これらの建物の中に、大石を使った白状のものが少なくとも20個ある。これらは比較的限られた範囲内に散在している。その中には、ひとつの石にいくつもの凹みを持つものも数例みられる(写6)。遺跡の周辺には、放棄された階段耕地が広がっている(写7)。土器片は比較的多く、赤褐色ないし茶褐色の無文のもの他に、赤地に黒・白で細かい文様を施し

たものがみられる。その他に、円形、方形の板状土製品が数点ある（写22-25）。

チュキバンバ地方は、その名のとおり後期中間期(紀元 1000-1400年)にアレキパ県西部に栄えたチュキバンバ文化の一つの中心地であった。ここがチュキバンバ文化に属することは、採集した土器片のひとつ（写22の左下）が、この文化のものと報告されている土器の文様 [LUMBRERAS 1974: 212] と全く同じであることから明らかである。この遺跡は、谷を一望にするという立地、規模の大きさ、頂上部に広場を持つという構造からみて、この地域で最も重要な場所のひとつであったと思われる。とくに数多くある石臼が、日常的な用途ではなく、例えばチチャ chicha というトウモロコシ製の濁り酒の製造など、儀礼と関連した用途に用いられたと思わせるものであるところからも、ここが単なる住居址ではなく何らかの宗教的・行政的センターとしての機能を持っていたことを推定させる。現在の町はここから 30 m ほど下の、ほとんど似たような丘陵先端部にあるが、町のすぐ横を小さな川が流れている点が異なっている。

ワマンタンボ Huamantambo チュキバンバの町の北東約 1 km、コタワシへ向う道路の両側の起伏の多い斜面にある（写8）。標高は約 3,000 m で、このあたりは大きな石が多数転がっており、その間にまばらに灌木が生えている。

遺跡の範囲ははっきりしないが、土器片の散布地域から少なくとも 500 m 四方はある。ただ、ここからさらにコタワシ方面へ数 km 行ったあたりにも、土器片が散布している部分があり、もっと広いものかもしれない。建物の壁と思われるような石積みは全くみられない。ただ大石の間のところどころに、大小の石を人工的に積んだような感じを与えるものがある。また、穴の中に落込んだような形の石積みもみられる。土器片は非常にまばらに散布しているが、完形土器が割れたかのように、一カ所に固まっている場合もある。土器片の多くは明褐色ないし橙色の無文のものであるが、彩文による幾何文を持つものが少しある。その他に、黒曜石の剝片が2点、円形の土製品が3点採集されている（写26, 27）。

この遺跡は、建造物らしいものが全く遺されていないこと、人工的と思われる小さな石積みがあること、土器の散布にばらつきがあり、時に完形土器が破片となって一カ所にかたまっていることなどの理由により、墓地であったと考えられる。墓の構造はわからないが、おそらく地中に掘込んだ墓壇の上に石を積んだようなものであろう。この墓地に対応する住居址としては、前述のハランパが考えられるが、直線距離にして約 3 km 離れており、また前述のようにハランパの性格が特殊なものであったとすれば、その住民であった支配者階級の墓地としてはあまりにも貧弱である。あるいは

現在の町がある所にかつての一般人の集落があり、この墓地はそこの住民のものであったということも考えられる。時期はおそらくチュキバンバ期であろう。

チュユコ Chulco チュキバンバからコタワシへの道を約 30 km 行った、チュユコという丘陵の北東部で、道路の左手 300 m ほど奥にある。ここはチュキバンバ谷を登りつめた台地の上で、標高は約 4,000 m の亜高山湿潤灌木林地帯に入り、周辺に耕地は全くない。前方の低い丘陵越しに、コロプナ Coropuna 峯の雪を頂いた山頂部がみえる。

遺跡は丘の麓に沿って、長さ 5-600 m、幅 30 m ほどの範囲に広がっている(写9)。大部分が 7 m×4 m ほどの矩形の独立した建物で、数は崩れ落ちたものも含めて30以上ある。建物の壁は粗い割石を積んだ高さ 2.5 m ほどのもので、比較的保存の良いものが多い。大石で区画された入口がひとつと(写10)、内部奥壁に小さな壁龕が2つある。大部分の入口は北東、すなわちコロプナ山の方を向いているが、北西向きのものも若干ある。これらの建物群の背後のやや高い部分に、石を積んだ低い円形の遺構がいくつかみられる。遺物は比較的厚手の無文の土器片が多いが、薄手で彩文を持つものもある。その他に、打製石器、石核、ブレード状剥片が各1点採集されている(写28-30)。

この遺跡の時期に関しては、土器片の中にインカ特有の尖底壺の底部や皿と思われるものがあるので、インカ時代と考えられる。しかし性格についてはよくわからない。建物の配置・構造からみて、住居址群とは考え難い。周辺に全く耕地がない場所であるため、少なくとも農耕民の集落ではないし、かといってリャマ、アルパカを飼育していた牧民のものとするには、建物があまりにも立派すぎる。この場所が地理的に東のオコニャ川流域と、西のカマナ=マヘス川流域との接点に当たることから、インカ時代の交通路の要所に設けられていた宿駅のような役割を持っていた場所であろうか。当時の物資運搬が専らリャマに頼っていたことを考えると、背後に家畜囲いと思われる円形遺構のあることは、その可能性を推定させるひとつの資料ではある。しかし、インカの宿駅とされる遺構は、一般に大きな細長い建物で内部にいくつかの部屋を持つとされており、この遺跡とは構成が異なっている。いっぽう、コロプナ山の付近にはインカ時代に多くの人々を集めた神殿があったという記録があり [CIEZA DE LEON 1967: 97-98]、また、この山の周辺の農民社会では、コロプナは死者の魂の集まる所として知られている³⁾。以上の点から、この遺跡は記録にある神殿ではないに

3) 友枝啓泰氏の御教示による。

でも、神殿への巡礼者のための施設といったような、宗教的な性格を持つものであったかもしれない。

3. タンボ川流域

ベヤ・ビスタ Bella Vista タンボ川の支流のひとつであるエスキノ Esquino 川の源頭近く、プキナの町のすぐ南側にある。標高 3,500 m の舌状に張出した丘陵の頂上部を占める。この辺りは低部山地乾燥灌木林地帯で、遺跡のある丘の上はサボテンや小灌木の生えた荒地である。しかしまわりの谷の斜面は、全て階段耕地でおおわれている。

遺跡の広さは約 100 m×20 m である。町に近いのかほとんど破壊されており、遺構は何も残っていない(写11)。わずかにいくつかの鞍状の石臼、土器片が散在しており、遺跡であることを示している。町人の話では墓地もあるということで、学校にこの遺跡から出土したという完形土器が、100点以上保管されている(写31)。表面採集した土器片は、厚手の無文、赤地黒彩の有文のものからなる(写32)。

この遺跡については破壊がひどく進行しているため、構造に関して詳しいことは不明である。石臼があることから住居址であることが考えられるし、町人の話を信じれば墓地もあったということになる。しかし、建造物や墓の大きさや形、構造についての資料はない。時期は、学校にある土器の中にインカ式とチュラホン Churajón 式の両者があるので、この両文化期にわたると考えられる。プキナ周辺は、現在チュラホンとよばれている文化が、かつてはプキナ文化と名付けられていた [BERNEDO MALAGA 1958] ように、アレキパ県東部を中心とした後期中間期の文化の中心地であった地域である。チュラホン文化の標式遺跡である、チュラホンあるいはサワカ Sahuaca の大遺跡も、プキナの南西約 15 km の所にある。ベヤ・ビスタはそれに比べると規模ははるかに小さい。しかし、現在プキナの町が占めている場所が、かつての集落であったことや、周辺の階段耕地も先スペイン期以来のものであることが考えられるので、ここもチュラホンに匹敵する大遺跡であった可能性は十分ある。

マウカリャクタ Maucallacta プキナからオマテ Omate への道を約 5 km 行った、カピリャ Capilla への分れ道の右手にある。生態環境は前のベヤ・ビスタと同じで、現在はサボテンや小灌木におおわれている。しかしこちらは近くに階段耕地はみられない。標高は 3,250 m である。

遺跡は、比較的傾斜の強い丘陵の尾根の頂上から下の斜面にかけて広がっている。広さは約 1 km×100 m である。斜面には傾斜に応じて階段状に土留壁が設けられ、

その間の平坦部に粗い石積みの壁を持つ方形の部屋、円形・方形の小構造物が造られている(写12)。遺跡が広いわりには表面採集された土器片の数は少ない。大部分が褐色の無文の破片であるが、彩文(橙地黒色)が2片あるほか、断面が円形の把手がいくつかある(写33, 34)。

この遺跡は、規模・構造からかなり大きな集落であったと考えられる。このように、傾斜地に土留壁を設けて、階段状に建物を造るのは高地に広くみられる方法である。小型のものは住居と思われる建物の間にあり、墓とも考えられる。しかし崩れたものの中に人骨片がないので、あるいは貯蔵庫のようなものかもしれない。時期は、写真34の左上の土器片が、典型的なインカ文様のものであるため、インカ期と思われるが、チュラホン式のものもあるので、その時期まで遡るかもしれない。

4. イロ=モケグア川流域

トゥミラカ Tumilaca モケグア市からトラタ Torata への道を約 15 km 行った、トゥミラカ・モリノ Tumilaca Molino 部落の西にある。モケグア川の支流トゥミラカ川右岸の、川面からの高さ 20 m に近い段丘上で、標高は約 1,900 m である。この付近は低部山地砂漠で、サボテンがまばらに生えているだけの全くの荒地であるが、川底の平坦部および対岸の傾斜地の下部は、灌漑による耕地となっている(写13)。

遺跡の広さは約 300 m×150 m で、ゆるやかな傾斜地に低い土留壁でテラスを設け、平坦部に部屋が造られている(写14)。部屋の壁はほとんど崩れているが、土留壁は比較的残っている。石積みは割石と河原石が使われ、石の大きさは大小さまざまである。部屋の大きさは約 5 m×3 m ほどで、低い方に入口がある。部屋の内部に仕切りのような低い壁を持つもの、仕切られた中の一方が石を敷詰められ高くなっているものなどもある。南東部の浅い沢状のところは墓地になっている。一部が盗掘されており、丸石で囲まれた径 4-50cm、深さ 1 m 弱の墓壙が数個露出している(写15)。墓壙にはおそらく平石の蓋があったと思われる。土器片はあまり散布していない。大部分が茶褐色の無文のものであるが、有文(黄褐色黒・白彩)が少しみられる(写35)。案内人の少年が以前墓地のあたりで拾ったという完形土器は、高さ 5 cm、径 10 cm ほどの平底外反鉢で、黄褐色地に黒線で鳥の文様が描かれているものである。土器片のほかには、大型の良く使いこまれた隅丸方形の皿状石臼、ボタン *batán* とよばれる大きな平石の石臼、不定形の打製石器などが比較的多くみられる。しかし、ボタンの上石として使う半月形の石杵は少ない。

この遺跡は、立地、構造、遺物などからみて住居址であることは間違いない。遺跡

のある川の右岸は現在は全く乾燥しきった荒地であり、古い耕地の痕跡も認められない。当時も現在同様、谷底および対岸の斜面が耕地として使われていたのであろう。時期については、墓出土の完形土器が有力な資料である。この土器は、器形、文様からみていわゆる膨張ティアワナコ Tiahuanaco Expansivo 文化に属するものと思われる。ボリビア高地を中心として栄えていたティアワナコ文化が、いつ頃海岸地方へと広がり始めたかについては議論があるが、現在ではワリ文化の膨張とはほぼ同期、すなわち中期ホライゾンの頃とする説が強い [LANNING 1967: 127]。

カマカ Camaca モケグア市の北東約 15 km にあるトラタの町から、プノ Puno への道を約 40 km 行った道路の両側に広がる大遺跡である。標高は約 3,000–3,200 m の範囲におよぶ。生態環境は低部山地乾燥灌木林に入り、周囲は乾燥した荒地である。

遺跡はカマカとよばれる標高 3,500 m の丘の南東斜面にある。傾斜のややゆるやかな部分に建造物があり、その上と下に放棄された階段耕地が広がっている (写16)。全体の広さは正確につかめないが、少なくとも数 km 四方に及ぶと思われる。建造物のある部分も 1 km² 以上の範囲を占めている。建物は、比較的大きな石を目地土を使わずに積んだ 3 m×2 m ほどの部屋 (写17) がいくつかあるほかに、小型の割石で造られた 20 m×5 m ほどの大きな細長いものが、広場を囲むような形でみられる (写18)。これらの建物は隅に階段が設けられており、内部はいくつもの部屋に仕切られている。遺物はあまり多くない。厚手の無文土器と、橙地、赤褐地に白・黒・赤で細かい文様が施された薄手のものがあり、後者は細長い建物付近に多い (写36)。

この遺跡は、階段耕地の大きさに比べ建物の数が少ない。また、建物の構成も通常の農耕民の集落とは思えない特殊なものであるという特徴を持っている。そのあたりに多い彩文土器が、インカ時代のものと思われる点からも、ここはインカ期の行政センターであったということが考えられる。いっぽう、粗雑な石積みの建物は、これと同時期ということは考えにくい。構造が高地の牧民の住居と良く似ているので、あるいは、このあたりに交易か何かの理由で降りて来た牧民が残したものという可能性もある。しかし、これだけ大規模な階段耕地があるということは、ある程度の人口が必要であったと思われる。そこで問題となるのは、先スペイン期末期にティティカカ湖西岸に勢力を持っていたルパカ Lupaqa という集団が、高地では栽培できないトウモロコシなどのための耕地を、海岸のサマとモケグア地方に持っていたという記録である [DIEZ DE SAN MIGUEL 1964 (1567)]。Murra により垂直列島と名付けられたこのような土地利用 [MURRA 1972] の実体は、残念ながら多くの未解明の問題があ

る。〔MURRA 1975: 206〕。そのため、記録にあるからといって直ちにこの 2 つの谷の遺跡をルパカと結びつけるのは無理である。この問題の解決のためには、湖岸地方と海岸の谷間の両方で、発掘調査による詳しい資料を集めなければならない。

Ⅲ．南部ペルーアンデス西斜面地域の先スペイン文化の特徴

以上が、今回の主な調査地である南部ペルーアンデス西斜面の自然環境、および 9 カ所の遺跡の一般調査の報告である。それぞれの遺跡に関しては、すでに若干の考察を加えた。ここでは、これらの資料を基にして、この地域の先スペイン文化の特徴、他の地域との関係、現在の農牧社会との関係などに関する考察を行う。

現在までに行われた、南部ペルーアンデス西斜面の先スペイン文化に関する調査・研究によれば、この地域は中央アンデス地帯の中できわめて特殊な発展をした地域であるといえる。すなわち、他の地域では土器製作が始まり、おそらく定住農耕社会に入ったと思われる時期が、早い所で紀元前 2,000 年紀の初め、遅くともその終り頃であるのに対し、この地域のみが紀元 600 年頃と非常に遅れている。ただし、最南端のタクナ Tacna 地方に隣接するチリのアリカ Arica からは、紀元前 300 年前後のものとされる古い土器が知られている〔MOSTNY 1971: 183〕。この土器はさらに南のアタカマ Atacama 地方から広がってきたもので、ペルーではタクナ以北にはみられない。現在知られている限りでは、紀元 600 年以前のこの地域の遺跡は、全て先土器時代の狩猟採集民のものとされている。この停滞の原因としては、この地域の大部分が乾燥した砂漠であるうえ、地形的にも海岸に大きな平野がみられず、また内陸の川沿いの土地も両岸が峡谷状をなしているため、耕地として利用できるのはわずかな谷底の平地にすぎないということがあろう。しかし、周辺地域で土器文化が成立して以来紀元 600 年までの長い間、この地域は全くその影響を受けず孤立していたのであろうか。たしかに海岸部においては、山腹斜面が直接海に落込んでいるチャラからカマナの間は、現在でも交通の難所であり、かつては大きな自然の障害として北との交流の妨げとなっていたのであろう。南の方にはそのような障害はないが、この方面の文化は海岸平野という自然条件を背景として成立したものであり、そうした条件のないこの地域には広がらなかったのであろう。では東の高地との間はどうであろうか。この地域での土器文化の成立は、紀元前 1,000 年よりやや古いとされている。紀元前後になると、ティティカカ湖北岸にプカラ Pucará, 南岸に古典ティアワナコという、切石による神殿、石彫、美しい多彩色土器を作り出した宗教的性格の濃い文化が成立し

ていた。この両者のいずれかが、アンデス西山系を越えて西斜面にまで影響を与えたという資料は知られていない。むしろ古典ティアワナコは北へ進出して行ったようで、後にペルー中部高地のアヤクチョ地方を中心としたワリ文化の成立と深い関係を持っている。ティアワナコの北への進出は、おそらく高地では得られないトウモロコシ、棉、トウガラシなどを求めての結果で、ティティカカ湖岸から高原を北上し、アヤクチョ付近から海岸へ出、当時ナスカ文化が栄えていたペルー南海岸を目指したものである。このことは逆に、ティアワナコからより近い南部ペルーアンデス西斜面や、ボリビアのティティカカ湖東部の東斜面地域では、その要求に応えるだけの農耕社会が成立していなかったことを示すといえる。

では紀元 600年以降のワリ文化期になって、なぜこの地域が農耕社会に変わって行ったのであろうか。その原因はやはりこの地域の地形によるものと考えられる。すなわち、この地域の標高 2,000 m 以下の部分は、わずかな川沿いの狭い土地以外は利用できないことはすでに述べた。その上の標高 2,000–4,000 m の土地は、高原と台地をつなぐ部分で一般に傾斜が急である。また耕地として利用するには十分な降雨は見られず、灌漑をほどこさなければならぬ。傾斜地を階段状に整形して耕地にしたり、灌漑水路を建設したりする土木技術は、アヤクチョ地方では古くから発達していた [LUMBRERAS 1974: 135]。ワリ文化の広がりと共に、この土木技術が各地にもたらされたのであろう。Donkin の調査によれば、ペルーでは南部に階段耕地が比較的多い [DONKIN 1979: 144–148]。階段耕地は、基本的には乾燥した傾斜地で最も有効な耕地形態である。南部ペルーアンデス西斜面はまさにその生態環境に入る地域であり、階段耕地と灌漑という2つの土木技術の発達により、はじめて農耕社会の成立が可能になったと考えられる。

最後に、遺跡と現在の農牧社会との関係についての問題にふれよう。この地域の遺跡は、現在の集落の比較的近くにあるものが多いというのが、ひとつの特徴である。筆者がこれまで主として調査を行ってきたペルー北部高地の、とくに後期中間期の遺跡は、一般に山の頂上や丘陵の尾根上などの近づき難い場所にある。おそらく、北部では古くから農耕社会が形成され、異なった民族集団間の対立抗争がはげしかったことの表れであろう。それに対して南部では、中期ホライゾンになってから、それまでのいわば無人の地に、外部から進んだ技術を持って移住してきた人々により、農耕社会が成立したと考えられ、北部のような抗争はおきず、集落を耕地の近くに営むことができたためであろう。遺跡と現在の集落が近いということは、さらに、先スペイン期の農耕社会が、スペイン人による征服以降もあまり大きな変化を受けずに、現在に

いたっていると考えられることもできよう。ペルー南部では、遺跡を「祖父の家」*casa de abuelo* とよぶことがある⁴⁾ というデータも、遺跡と現住民とのつながりが他の地域より強いことを示すものであろう。しかしいっぽうで、ハランパやカマカにみられるような放棄された広い階段耕地があるのも事実である。放棄の理由が、植民地時代初期の急激な人口の減少によるものか、ルパカが海岸地方に持っていた“飛び地”が、本拠地から切離されてしまったためか、あるいはもっと別な気候条件の変化などによるものか判らない。この問題を考える際には、それぞれの遺跡の年代と属する文化の他、灌漑水路の体系なども合せて考えて行く必要があるだろう。

お わ り に

今回調査した地域は、中央アンデス地帯の他の地域のように華やかな古代文明が栄えた所ではないため、アンデス考古学研究者の興味と関心をあまり惹きつけなかった。しかし最近になって、この地域に関するエスノヒストリーの研究が大幅に進展したことは、本号の Pease の論文にも見られるとおりである。そのため、これらの歴史資料の具体的裏付けとしての遺跡の調査は、今後ますます要求されるようになってくると思われる。

今回は民族学調査の一環として先スペイン文化の調査をするという、筆者にとっては初めての経験であったし、調査地域もなじみの薄い所ということから、調査法、調査地の選定などの点で、決して満足のいくものではなかった。しかし、中央アンデス原住民文化の研究には、先史学、民族学、エスノヒストリーの3つの分野の協力が不可欠であるということを、身をもって体験したことは大きな収穫であった。

最後になったが、ペルーにおいて調査中お世話になった方々、とくに調査地に現地を良く知る学生の同行を許して頂いたアレキパ大学のゴメス教授にお礼を申し述べる。また、本研究の代表者である増田教授以下、研究分担者の方々には、調査中のみならず報告をまとめる際にいろいろと助言を頂いた。記して感謝の意を表する。

文 献

BERNEDO MALAGA, L.

1958 *La Cultura Puquina*. 2nd edición, Lima: Populibro.

CIEZA DE LEON, P.

1967 *El Señorío de los Incas*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

4) 友枝啓泰氏の御教示による。

藤井 南部ペルーアンデス西斜面地域の先スペイン文化

DIEZ DE SAN MIGUEL, G.

1964(1567) *Visita hecha a la Provincia de Chucuito por Garci Diez de San Miguel en el año 1567*.
Lima: Casa de la Cultura del Perú.

DONKIN, R. A.

1979 *Agricultural Terracing in the Aboriginal New World*. Viking Fund Publications in Anthropology No. 56. Tucson: The University of Arizona Press.

石田英一郎ほか

1961 *Andes: The Report of the University of Tokyo Scientific Expedition to the Andes*. Tokyo: Bijutsushuppan.

KUBLER, G.

1946 The Quechua in the Colonial World. In J. H. Steward (ed.) *Handbook of South American Indians*, Vol. 2, Smithsonian Institution, pp. 331-410.

LANNING, E. P.

1967 *Peru before the Incas*. Englewood cliffs: Prentice-Hall Inc.

LUMBRERAS, L. G.

1974 *The Peoples and Cultures of Ancient Peru*. B. J. Meggers, trns., Smithsonian Institution.

MISHKIN, B.

1946 The Contemporary Quechua. In J. H. Steward (ed.) *Handbook of South American Indians*, Vol. 2, Smithsonian Institution, pp. 411-470.

MOSTNY, G.

1971 *Prehistoria de Chile*. Santiago: Editorial Universitaria.

MURRA, J. V.

1972 El control vertical de un máximo de pisos ecológicos en la economía de las sociedades andinas. In Ortiz de Zúñiga (1972), pp. 429-476.

1975 *Formaciones económicas y políticas del mundo andino*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos.

ONERN (Oficina Nacional de Evaluación de Recursos Naturales)

1973 Inventario, evaluación y uso racional de los recursos naturales de la costa, Camaná-Majes. Lima: ONERN.

1974 Inventario, evaluación y uso racional de los recursos naturales de la costa, Quilca-Tambo. Lima: ONERN.

1975a Inventario, evaluación y uso racional de los recursos naturales de la costa, Acari, Yauca, Chala y Cháparra. Lima: ONERN.

1975b Inventario, evaluación y uso racional de los recursos naturales de la costa, Atico, Caraveli y Ocoña. Lima: ONERN.

1976 Inventario, evaluación y uso racional de los recursos naturales de la costa, Moquegua-Locumba-Sama y Caplina. Lima: ONERN.

ORTIZ DE ZUÑIGA, I.

1972 *Visita de la provincia de León de Huánuco en 1562*. Huánuco: Universidad Nacional Hermilio Valdizán.

ROMERO, E.

n. d. *Geografía del Perú*, Tomo 2. Lima: Librería Studium.

佐藤 久

1979 「アンデス山脈の形成」『地理』8: 9-20。



写真1 Ocoña 川河口付近



写真2 遺跡全景 (Coyota A)



写真3 遺跡全景 (Coyota B)



写真4 石壁と壁龕 (Coyota A)



写真5 頂上平坦部の土留壁 (Jarampa)

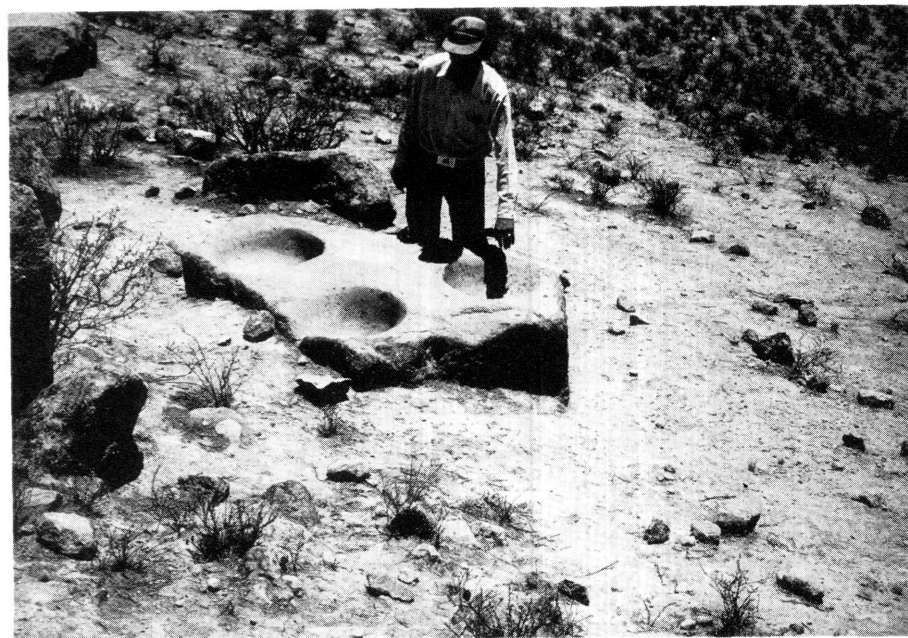


写真6 石臼 (Jarampa)



写真7 放棄された階段耕地 (Jarampa)



写真8 Huamantambo 付近の景観（遺跡は右端中段にある）

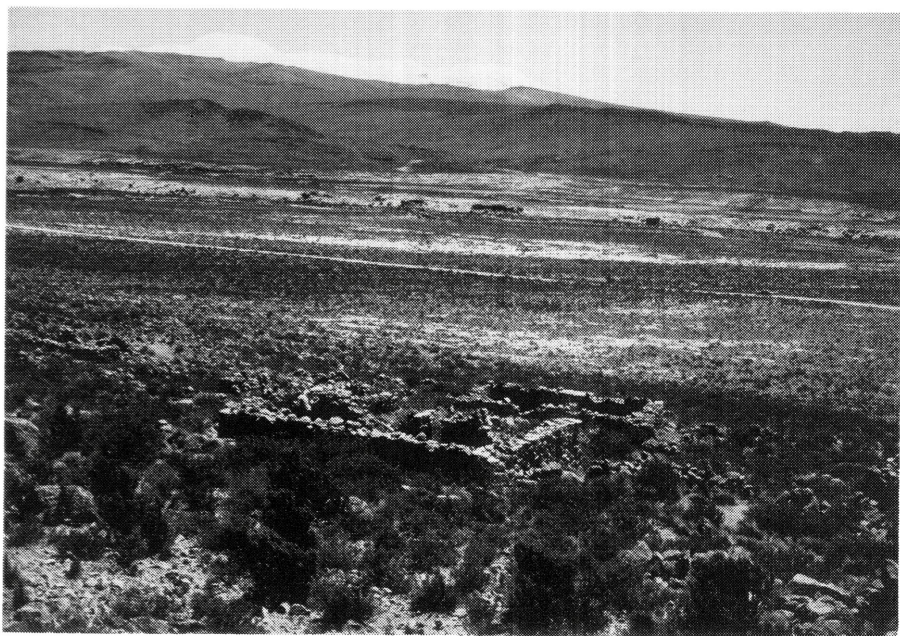


写真9 遺跡の景観 (Chullo) 後方に Coropuna 山の頂上が一部見える。



写真10 石積みと入口 (Chullo)



写真11 遺跡の部分 (Bella Vista) 後方に現在使われている階段耕地がみえる。



写真12 石壁と壁龕 (Maucallacta)

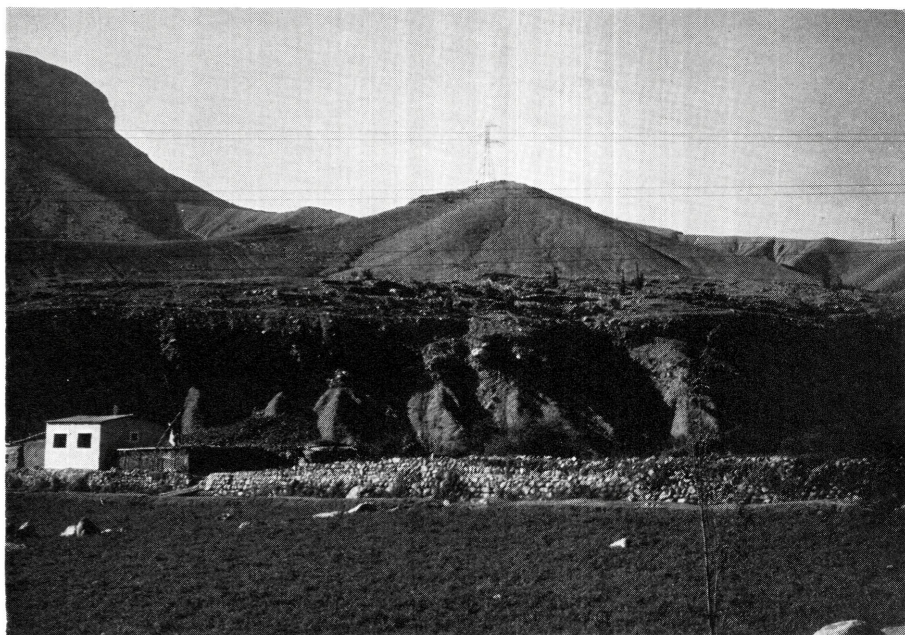


写真13 遺跡全景 (Tumilaca)



写真14 崩れた石壁 (Tumilaca)

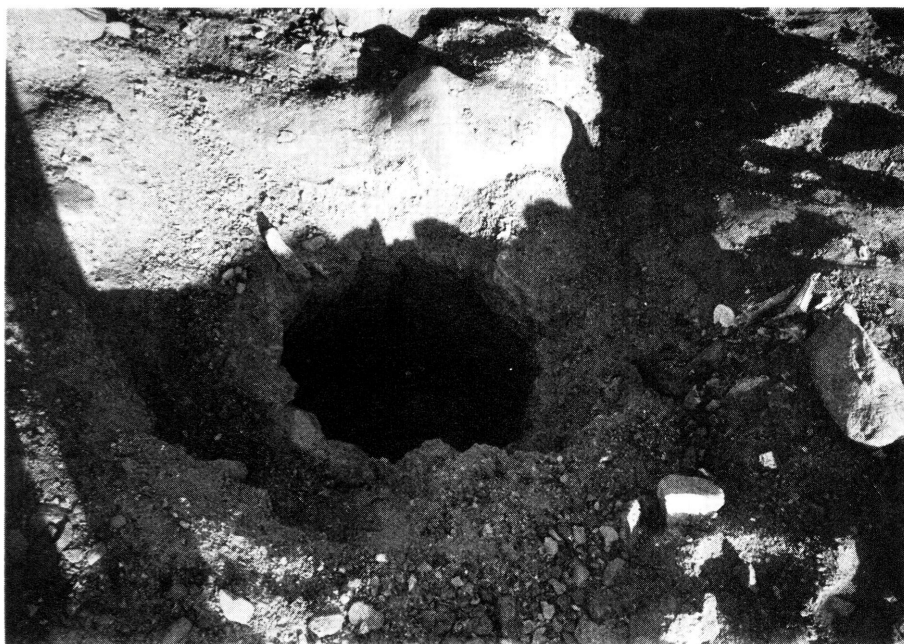


写真15 盗掘された墓墳 (Tumilaca)



写真16 放棄された階段耕地 (Camaca)



写真17 粗い石積みみの建物 (Camaca)



写真18 長方形の大きな建物 (Camaca)

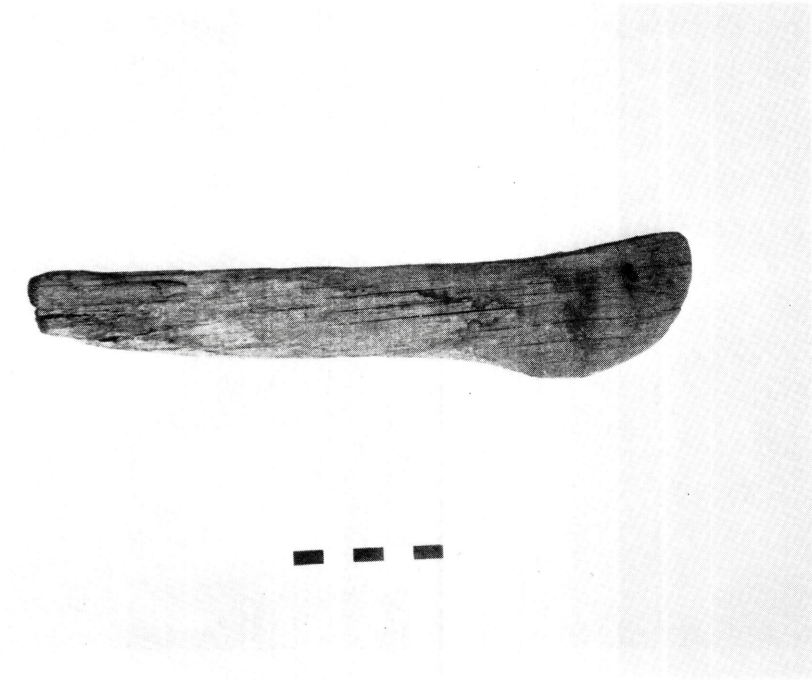


写真19 木製品 (Pueblo Viejo)

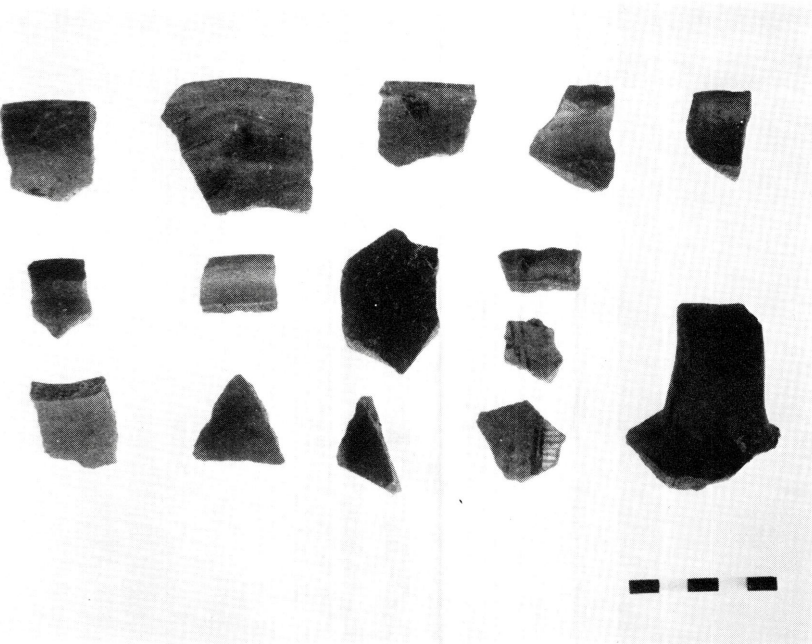


写真20 土器片 (Coyota A)

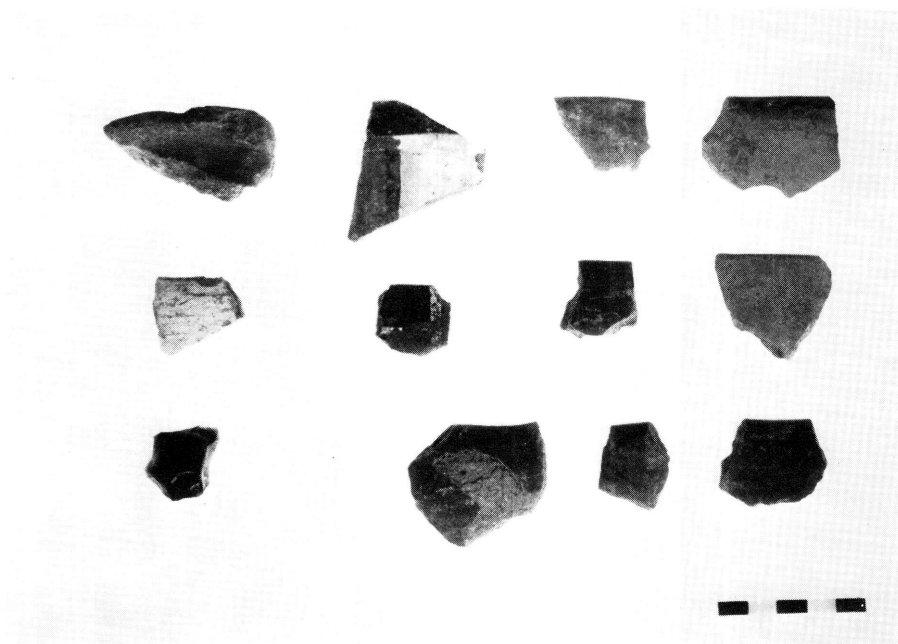


写真21 土器片（Coyota B の外）

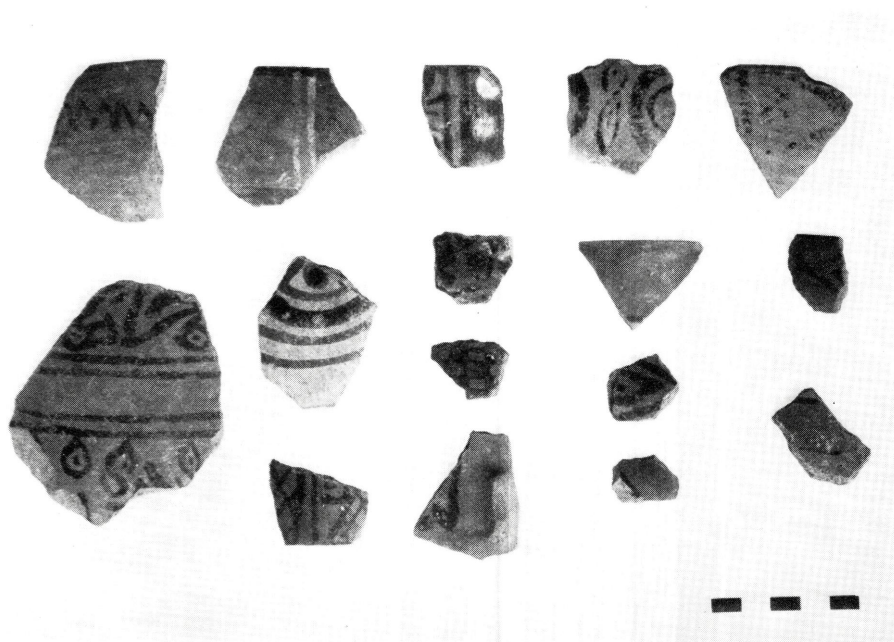


写真22 土器片（Jarampa）

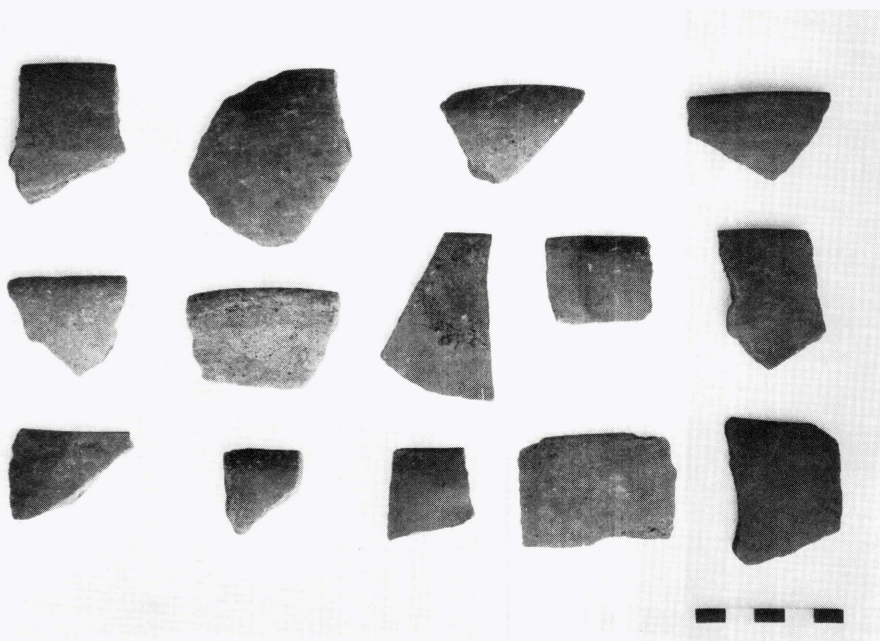


写真23 土器片 (Jarampa)



写真24 土器片 (Jarampa)



写真25 土器片と土製品 (Jarampa)



写真26 土器片 (Huamantambo)

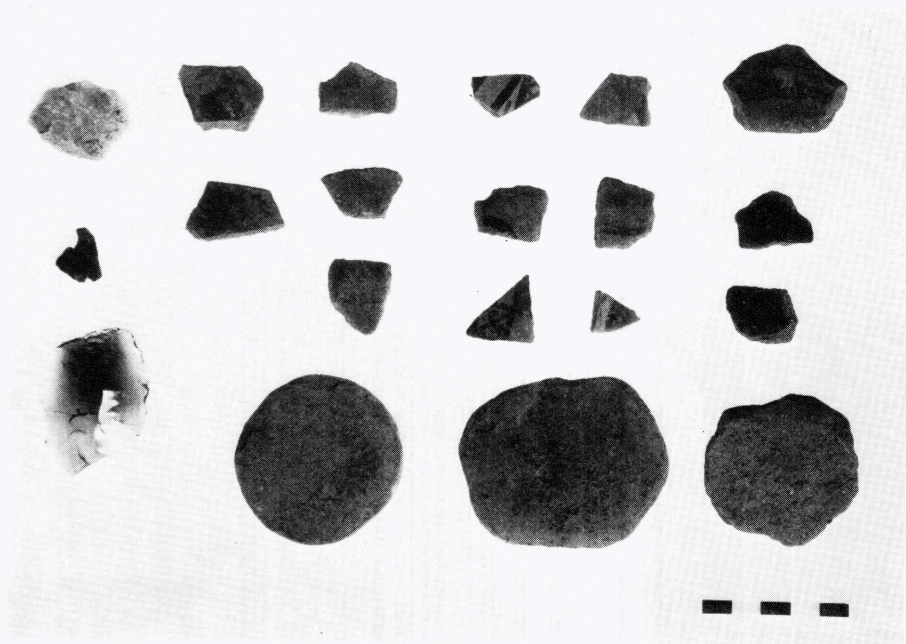


写真27 土器片，土製品，黒曜石の剥片 (Huamantambo)



写真28 土器片 (Chullico)

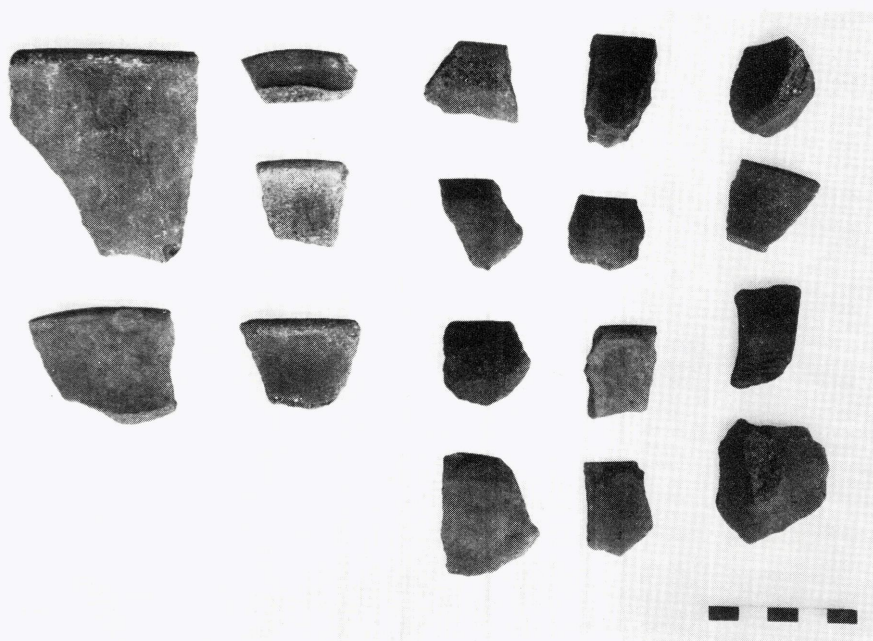


写真29 土器片 (Chullico)



写真30 土器片, 石器, 石核 (Chullico)



写真31 Bella Vista 出土とされる土器 (Puquina の小学校蔵)



写真32 土器片と石器 (Bella Vista)



写真33 土器片 (Maucallacta)

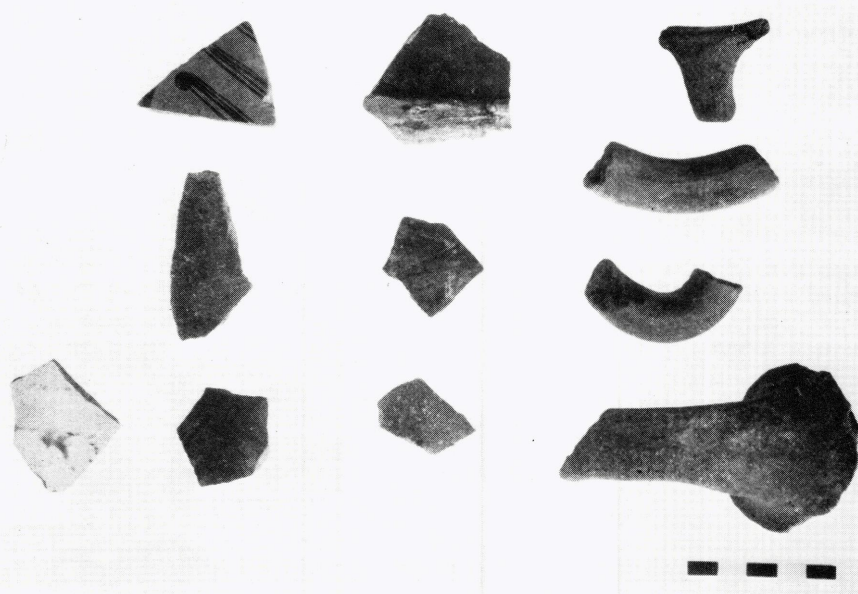


写真34 土器片 (Maucallacta)

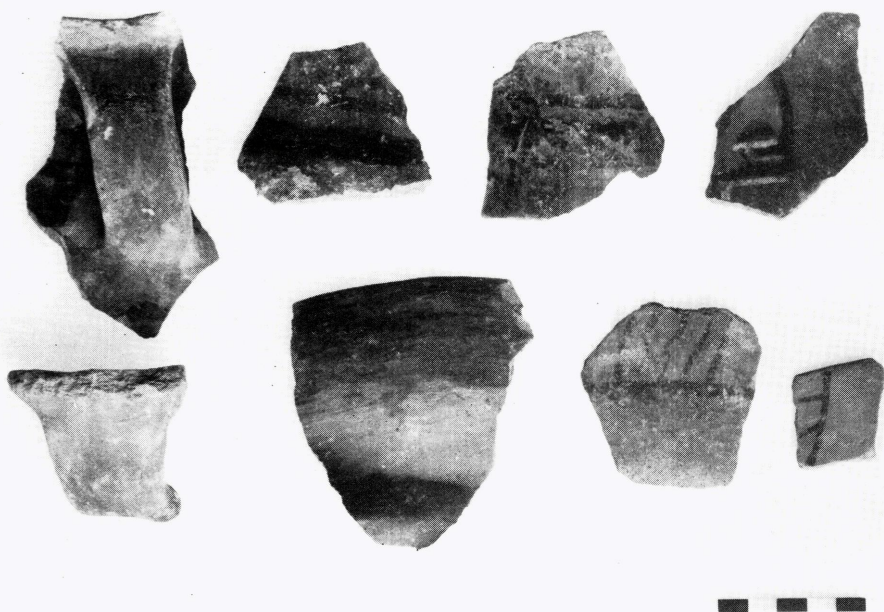


写真35 土器片 (Tumilaca)

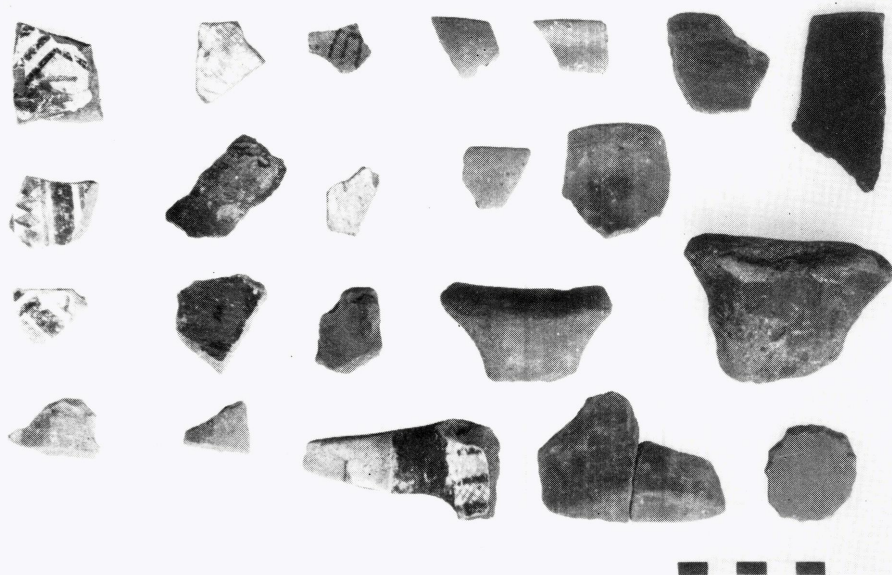


写真36 土器片，土製品 (Camaca)